どんな活動でも『なんのために』をしっかり持たないと…

1 月 28 日・2 月 18 日、教育実践講座「生徒会指導」を開催しました。この講座は高校の生徒会係教師を対象に企画しましたが、7 人の先生方が連続で参加されました。初めて生徒会係主任になった先生も複数いて、指導に当たっての悩みなども率直に交流しながら学び合いました。講師の須田章七郎さんは、Qs & As 方式の問題提起と実際の活動で使ったたくさんの資料を提供してくれました。学び合いの中からいくつかを紹介したいと思います。

3 月 18 日に予定していた第 3 回「体育祭をどうつくるか」は東日本大震災の直後で中止としました。

生徒手帳を生徒と一緒に読んでみましょう

第 1 回目(1/28)のテーマは、新しい生徒会本部役員も決まり、来年度の行事計画なども検討される時期にあたるので、「年度初めの準備や執行部の指導等」としました。

須田さんはまず生徒手帳の「生徒会会則」から生徒会活動の目的を読み直すことを勧めています。3 校の例を示しながら、「生徒会活動とは会員相互（全校生徒）が自主的な活動を通して民主的な力を付けていくこと。学校生活を通して様々な力を付けていく場」であり、「学校生活の充実を図ることが生徒会活動の目的である」と位置づけています。

さまざまな条件の下で生徒の自主的な取り組みが省略されがちな昨今、改めて、実際の指導場面で常に意識されるべき大切なことと思いました。

行事屋さんだけでいいのかな？

次に提起されたことは、執行部と一般生徒あるいは常任委員会との関係です。

「行事つくりや予算のことはとても大事な活動だが、それを型どおりにこなすだけでは不十分である。執行部は全校生徒の代表として、全校の要求を掘り起こし、具体的な方針にして活動していくことが大切」として、行事の充実への要求、学校の施設・設備への要求、学習や生活規律への要求などの「学校生活の充実を目指す要求」があると示されました。例えば、自販機の品目を変えてほしいとの要求があれば、一般の生徒たちは自分たちの要求を、基礎集団であるクラス（学級）で話し合い、評議会（協議会）や常任委員会に出して議論するということです。

生徒たちに「自分たちの要求で生徒会活動が成り立っているという意識を持たせる」ことが大切ですし、実践を通して民主主義を学ぶ場という位置づけがよく分かります。

執行部のリーダー性

生徒会活動を真に自主的・自治的なものにしていくためには、執行部（本部役員会・総局など呼び方はいろいろ）が、「しっかりした方針を持てるようにしてやることが大切」という須田さんの提起には誰もが頷けるところと思います。

須田さんが用意してくれた、総局会議やリーダー研修会で実際に使われた資料からポイントと思われることを拾い上げてみます。

・「原案→討議→実践→総括」をきちんと。
・週 2 回「総局会議」・月 1 回「協議会」を。
・基盤はクラス。クラス活動の活性化を。
・月 2 回「生徒会紙」発行。

一口で言えば、「“原案”を作る力」と「“討議”ができる力」を付けさせる、そして「“見える（開かれた）”活動にすること」を意識する、となるでしょうか。とりわけ本部役員が 1 つ 1 つの取り組みを通して、生徒たちが「何ができたか、できなかったか」をしっかりと“総括”をすることが、次の“見通し”を持った原案・方針つくりに発展していくのだと思いました。

文化祭を「学び」の場に

第 2 回目(2/18)のテーマには、生徒会活動の中でも最も規模の大きい取り組みとなる「文化祭」を取り上げました。生徒会係主任の立場にあると、文化祭の「企画内容をどう作るか」と「全校生徒・教職員をどう組織的に動かすか」の 2 つの課題を背負うことになります。

講師の須田さんから桐女「すずかけ祭」（1978・79 年）と伊女「飛翔祭」（2000・03 年）での取り組み、前橋清陵高校の坂田さんから毎年開催の「文化発表会」の詳細な総括文書が紹介されました。

生徒たちの多くは、例えばお化け屋敷や模擬店など娯楽性の強いもの、お客と一緒に遊ぶものを求めます。このような状況に対して、須田実践は次の 2 つの共通する基本方針を立てています。『①文化祭を、自主的・能動的に学習を深める場とする。②クラス（学級）を基本にテーマを設定して発表する。』です。

要求の出し合いと討議

しかし、このような方針がいきなり認められる訳はありません。生徒には生徒会執行部やリーダー研修会、教職員には生徒会係や生徒指導部で、それまでの文化祭の実態を振り返り、他校の取り組みなどを学びながら、「どのような文化祭にしたいか」の討議を経て方針化して行きます。さらにそれを全校クラス討議や職員会議にかけて文化祭へのイメージと要求を出し合い共通理解へと深めています。

実際にはほんとうに多くの時間と労力を必要とする取り組みで、全校生徒を動かし切るのはなかなか大変なことである。しかし、“要求の出し合いと討議”なしには「主体的・能動的に参加する行事」は生み出せないな、と実感しました。

時代・社会と生徒の生活をつなげる

「クラス（学級）を基本にテーマを決める」と言っても、どんな内容にするかで生徒もクラス担任も大いに悩むのが現実です。

桐女の取り組みでは「広く社会や自然に目を向け、社会現象や高校生をとりまく文化を追求したもの、日常の学習内容をさらに追求し発展させたもの」という方針を提示しています。伊女の 2000 年の場合は、「20 世紀最後の年でもあり、今世紀を多方面から分析し、21 世紀への展望としていくような中身を」という方針で、16 にも及ぶ切り口を具体的に例示しています。前橋清陵では、定時制・通信制という条件から、教科や講座単位の企画も大事にして、参加と協同を促しています。

生徒たちの時代を見る目には鋭いものがあります。それを日常の学習と結びつけて表現できるという「面白さ」を文化祭は持っていると感じました。

それでも「そんな堅苦しいのは面白くない」という声がよく出されます。それにどう答えるか。伊女の文化祭企画委員会が出した「クラス発表成功 4 つの“こつ”」にはこう記されています。「①徹底的に調べ研究し、明確な主張を持つ。②工夫とエンターテイメント性のある発表をしよう。③空間演出のために、計画的な早い準備をしよう。④クラスの人の個性を生かし、みんなの協力が一番大切。」

これは各学校でぜひ活用し、創造性を発揮してもらいたい視点だなと思いました。

生徒会係はプロデューサー兼ディレクター

文化祭では特に生徒会係の企画力と同時に実務面での“見通しと段取り”能力が求められます。須田さん、坂田さんから示された資料には、生徒や教職員をどう組織し、とりわけ生徒の自主的な動きをどうやって作りだしていくかのヒントにも溢れていました。

参加者から、「“何のために”をしっかり持つことを学んだ。」「学んだことを土台に今年の実践に取り組みたい。」「資料に感謝。」などの感想が語られました。　（文責：加藤彰男）